新約聖書 ルカによる福音書 6 章 17 節―26 節（新共同訳）

[17]イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。大勢の
弟子とおびただしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスや
シドンの海岸地方から、[18]イエスの教えを聞くため、また病気をいやしていた
だくために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人々もいやしていただいた。
[19]群衆は皆、何とかしてイエスに触れようとした。イエスから力が出て、すべ
ての人の病気をいやしていたからである。
[20]さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸い
である、／神の国はあなたがたのものである。[21]今飢えている人々は、幸いで
ある、／あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、／あな
たがたは笑うようになる。[22]人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い
出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。[23]そ
の日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預
言者たちに同じことをしたのである。[24]しかし、富んでいるあなたがたは、不
幸である、／あなたがたはもう慰めを受けている。[25]今満腹している人々、あ
なたがたは、不幸である、／あなたがたは飢えるようになる。今笑っている
人々は、不幸である、／あなたがたは悲しみ泣くようになる。[26]すべての人に
ほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たち
に同じことをしたのである。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「幸い」

マルティン・ルターはこう述べています。「信仰とは神の恵みに対する生きた、大胆な信頼であり、そのためには千度死んでもよいというほどの確信である」。

「千度死んでもよい」とは凄い言葉です。現実で千度死ぬことはないにしても、これくらいの覚悟を持って、私たちは生きていけば良いということではないでしょうか。荒波や嵐の中を航海せねばならない時もある私たち人間の生において、これは大きな勇気と力を与えられる言葉だと思います。

さて、普段から何気なく使う「力」という言葉ですが、「力」とは何でしょうか。力とは、人をいやしたり、元気づけたり、大いなる目的と理想に向かって駆り立てていくものであり、また、それ以上の働きをするものです。私たち人間は、空や海などの自然から力を得ることもあれば、人から力を得ることもあるでしょう。

そしてやはり全ての人間にとって、とてつもなく大きな力や原動力になるのは、人から得る力ではないでしょうか。

本日の福音書には、「イエスから力が出て、すべての人の病気をいやしていたからである」とあるように、イエスの力について記されています（ルカ 6:10）。

その力は、ただいやすことに留まりません。イエスから出たその力は、イエスに触れてもらった者たちに作用し続け、神の力の中で彼らを動かし続けていくのです。

神の働きは、人間をただ自己防衛の姿勢、守りの姿勢で生きることに留めることはありません。私たちはただひたすらに、大いなる愛をもって私たちに働きかけてくださる神の恵みと意志に動かされます。その結果、愛に基づく行動をし、神と共に道を踏みしめていくことへと促されています。そしてそこに、私たち人間の神への応答、神との交わりが生み出されていくのです。

本日の福音書は、イエスが十二人の弟子たちを選んだのち、弟子たちと共に山から下りて、平地に立つ場面から始まります。イエスがそこに立ったのは、イエスに助けを求めてあらゆる場所から集まってきた人々のためでした。イエスがここで「平らなところにお立ちになった」とは、イエスが人々と同じところまで下りてきて立ち、人々の嘆きや苦しみに耳を傾け共にいてくださる方であることの表れです（ルカ 6:17）。

イエスは、嘆き苦悩する者を、神を賛美する者へと変えることができる、主なる神としてそこに立っていました。たとえ、八方塞がりで、出口が見えない嘆きや苦悩であっても、私たちは主イエスのもとで嘆き苦悩することがゆるされています。祈るとは、神に向かって自分の本心を打ち明けることです。主イエス・キリストのもとで、私たちは苦悩し、嘆きを嘆ききったのちに、喜びと希望にあふれて神を賛美することができるのです。

イエスは、聖霊の力によってすべての人の病気をいやし、「貧しい人々は、幸いである」から始まる「平地の説教」と呼ばれる、人々への祝福の言葉を語ります（ルカ 6:20）。

「貧しい人」とは、単に経済的な貧しさだけを表す言葉ではありません。「貧しい人」とは、「捕らわれている人」「目の見えない人」「圧迫されている人」など、様々な理由で社会の片隅に追いやられている人すべてを含む言葉です。「貧しい人々」がなぜ幸いなのでしょうか。それは、神の国はその人たちのものだからです。

さらにイエスは「今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」と言いました。神は「貧しい人」「飢えている人」「泣いている人」であるあなたがたを救いに来てくださり、それによってあなたがたは笑うようになる、だから幸いだということです。

「幸いである」（マカリオス）とは「ああ、何としあわせなことか」という意味です。父としての神が、子である私たち人間を祝福してくださり、慈愛に満ちた希望を語るのです。

自分が煩っている病を治してもらいたいとは、人間のもつ普遍的な願いでしょう。しかしまた、いかなる病のいやしにもまさる救いがあります。それは、罪のゆるしの救いです。罪と闇に支配されていた者が、主イエス・キリストの贖いにより、すべてをゆるされ、神の恵みと愛の世界に移される救いです。

ある有名な歴史上の作家が、階段から落ちて大怪我をした時、「こんなものは、自分の心の痛みに比べればなんてことはない」と言ったというエピソードが私の中でとても印象に残っています。

人間は、体の痛みだけではなく、心の痛みを伴う存在です。

エレミヤ書 17 章 14 節にこうあります。「主よ、あなたがいやしてくださるなら／わたしはいやされます。あなたが救ってくださるなら／わたしは救われます。あなたをこそ、わたしはたたえます」。

人間は人から、大きな力を与えられる存在です。だからこそ、神から遣わされた主イエス・キリストは、人としてこの世に降り立って来たのです。

私たちの心のうちに、いつも主イエス・キリストが共にいます。

私たちは、いかなる時もそれを忘れずに、試みの時も、喜びの時も共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。
天の神様。いつも私たちに大きな力を与えてくださりありがとうございます。あなたの祝福を受け、私たちが喜びにあふれて生きていくことができますように。イエス・キリストの御名によって。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 17 章 5 節―10 節（新共同訳）

[5]主はこう言われる。
呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし／その心が主を離れ去っている人は。[6]彼は荒れ地の裸の木。恵みの雨を見ることなく／人の住めない不毛の地／炎暑の荒れ野を住まいとする。[7]祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。[8]彼は水のほとりに植えられた木。水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている。干ばつの年にも憂いがなく／実を結ぶことをやめない。
[9]人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。[10]心を探り、そのはらわたを究めるのは／主なるわたしである。それぞれの道、業の結ぶ実に従って報いる。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 一 15 章 12 節―20 節（新共同訳）

[12]キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。[13]死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。[14]そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。[15]更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。[16]死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。[17]そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。[18]そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。[19]この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。
[20]しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。

教会讃美歌　292 番「重荷をにないて」1,2,3 節、328 番「主イェスにしたがう」1,2,3 節、346 番「はかりも知られぬ」1,2,4 節